C.ディケンズ　小池滋訳

オリヴァー・トウィスト

CHARLES DICKENS　下　OLIVER TWIST.

ちくま文庫

オリヴァー・トゥイスト（下）

一九九〇年十二月　四　日　第一刷発行
二〇〇六年一　月二十五日　第六刷発行

著　者　C・ディケンズ
訳　者　小池　滋（こいけ・しげる）
発行者　菊池明郎
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都台東区蔵前二―五―三　〒一一一―八七五五
振替〇〇一六〇―八―四一二三
装幀者　安野光雅
印刷所　三松堂印刷株式会社
製本所　三松堂印刷株式会社

乱丁・落丁本の場合は、左記宛に御送付下さい。
送料小社負担でお取り替えいたします。
ご注文・お問い合わせも左記へお願いします。
筑摩書房サービスセンター
埼玉県さいたま市北区櫛引町二―六〇四　〒三三一―八五〇七
電話番号　〇四八―六五一―〇〇五三
© SHIGERU KOIKE 1990 Printed in Japan
ISBN4-480-02500-6 C0197

オリヴァー・トゥイスト（下）

C.ディケンズ
小池滋訳

筑摩書房

目次

第二巻（つづき）

第三十章　危機一髪……一〇
オリヴァーが親切な友人とともに過ごしはじめた幸せな生活……二九
第三十二章　オリヴァーとその友人の幸福に突然黒い影が射す……四三
第三十三章　今回から登場する若い紳士について若干の説明を加えて紹介し、オリヴァーの身にふりかかった新しい冒険を物語る……五八
第三十四章　オリヴァーの冒険は不満足な結果に終わり、ハリー・メイリーとローズがかなり重大な会話を交す……七五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

第三十五章　とても短いので、これだけではそれほど重要な一章とは見えないかもしれないが、それでも前章の続きとして、それから時至ればこの後に続くべき章への鍵として読まなくてはいけない……八八
第三十六章　読者諸兄姉が本篇の第二十七章を思い返して見られる時、結婚生活において珍しくはないある対照にお気づきになる一章……九三

第三巻

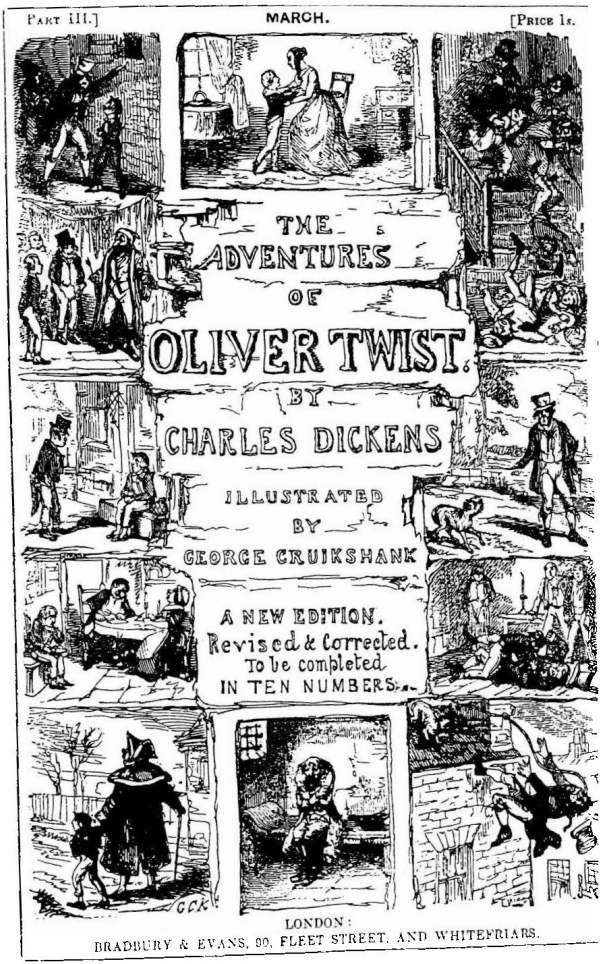
第三十七章　夜の会見の席上バンブル夫妻とモンクスとの間でとり行なわれたことの次第……一一三
第三十八章　すでに読者もご存知のご立派な方々が登場し、モンクスとユダヤ人がお頭を寄せ合って相談する……一二九
第三十九章　前章の続きとして起こった異様な会見……一四六

第四十章　新たな発見があいつぎ、不幸と同じく意外もまた常に踵（きびす）を接して訪れるものであるという証拠を呈する……一六六
第四十一章　オリヴァーの昔の同僚がその才能を十二分に発揮したお蔭で、首都の名士となる……一八二
第四十二章　アートフル・ドジャーが面倒なことになる……二〇〇
第四十三章　ナンシーがローズ・メイリーへの約束を果たすべき時が到来するが、果たすことができない。ノア・クレイポールがフェイギンから秘密の仕事を引き受ける……二一七
第四十四章　果たされた約束……二三五
第四十五章　哀れな最期……二五二
第四十六章　サイクスの逃亡……二六五
第四十七章　モンクスとブラウンロー氏がついに会うこととなる。二人の会話。その途中にとび込んだ知らせ……二八一
第四十八章　追跡と逃走……二九八

第四十九章　いくつかの謎が解き明かされ、お金の話は一切ぬきで結婚申し込みがなされる……三一八
第五十章　ユダヤ人のこの世で最後の一夜……三四一
第五十一章　最後の章……三五七
解説……小池　滋　三六五

本文装画（中扉裏除く）　ジョージ・クルックシャンク

オリヴァー・トウイスト（下）



1846年版〔分冊本の紙表紙〕

第二巻（つづき）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

第三十章

危機一髪

「どなたですか？」ブリトルズは鎖をかけたまま玄関の戸を細目に開け、手で蠟燭の火をかくして外を覗きながら言った。

「戸を開けてくれ」外にいる男は答えた。「今朝がた迎えを貰ったボウ・ストリート警察の者だ」

こう言われて安心したブリトルズが、戸を全部開けひろげて見ると、大外套を着たどっしりした男が立っていた。彼はそれ以上一言も言わずに中に入って来ると、まるで自分の家に帰って来たみたいに落ちつきはらって、靴の泥を拭った。

「若いの、誰かを外にやってわしの同僚と代わってやってくれ」刑事が言った。「馬車に乗って馬の手綱を握っているんだ。五分か十分ばかり入れる馬車小屋がこの屋敷にあるかね？」

ブリトルズがはいと答えて車庫の方を指さすと、肥った男は庭の門へ戻って行き、同僚

に手をかして馬車をその中へ引き入れた。その間ブリトルズはすっかり感心したように、二人を明かりで照らしていた。それが済むと刑事は屋敷に引き返して客間に案内され、大外套と帽子を脱ぐとその格好をあらわした。

玄関の戸を叩いた方の男は、五十歳くらいの肥った中背の男で、つやつやと光った黒い髪の毛を短く刈りあげ、半分くらい頬ひげを生やし、丸顔で目つきの鋭い男だった。もう一人は赤髪の骨ばった痩せた男で、鼻がいやらしく上を向いていて人相悪く、長靴をはいていた。

「ご主人に、ブレザーズとダフが来たと伝えてくれ」肥った方の男がそう言いながら髪をなでつけ、テーブルの上に手錠を置いた。「いやご主人、今晩は！　ちょっとあなただけとお話をしたいのですが」

これはその時入って来たロズバーン氏に向けられた言葉であった。そこで彼はブリトルズに退がれと手で合図をしてから、二人の婦人を連れて来て、ドアを閉めた。

「こちらがこの家の奥さんです」ロズバーン氏はメイリー夫人を紹介した。

ブレザーズ氏はお辞儀をしてから、すすめられるままに椅子に坐って帽子を床に置くと、ダフにもそうしろと手で合い図した。ところがこちらのお方は、どうやら上流社会になれていないのか、あるいはそうした社会では窮屈に感ずるのか――そのどちらかであろうが――手足を何回もきまり悪そうにもじもじ動かしてから椅子に坐り、ばつが悪そうにステッキの頭を口の中へ突っ込んだ。

「さてご主人、こちらの泥棒事件のことですが」ブレザーズが言った。「どんな工合でしたか？」

ロズバーン氏は時を稼ぐつもりらしく、ひどく廻りくどい言い方で長々と事情を説明した。その間ブレザーズ、ダフ両氏はいかにも心得顔をして、時々うなずき合った。

「もちろん現場を見るまでは確かなこと言えんのですが」ブレザーズが言った。「今のところの私の意見ではですな――その程度までは、はっきり言ってかまわんと思いますがな――これは田吾作の仕事じゃないですな。そうだろう、ダフ？」

「確かにその通り」ダフが答えた。

「今の田吾作という言葉をご婦人のために翻訳しますと、あなたのおっしゃるのはつまり、泥棒に入ろうとしたのは田舎の者ではない、という意味ですかな？」ロズバーン氏が微笑しながら言った。

「その通りです、ご主人」ブレザーズが答えた。「それで、事件についてはこれだけですか？」

「そうです」

「ところで、召使たちが話している、ここにいる子供というのは何のことですかな？」ブレザーズが言った。

「何でもないのですよ」お医者が答えた。「召使の一人が臆病風に吹かれたあまり、あの子が泥棒事件と何か関係があるなんて思い込んでしまったのですな。何ともばかばかしい、

滑稽な話で」

「それならば、至極簡単な話なんだがね」ダフが言った。

「この男の言う通りです」ブレザーズはそうだそうだというようにうなずき、何気なく手錠を、カスタネットのようにカチカチ鳴らしながら言った。「その子供というのは何者ですか？　本人は何と言って説明してるのです？　どこからやって来たのです？　まさか雲から降って来たわけではありますまい？」

「もちろんですとも」お医者様は婦人たちの方を心配そうにちらと見て、「その子の身の上なら私がすっかり知っていますが、その話はおいおいするとして、まずしのび込もうとした現場をごらんになりたいでしょう？」

「そうですな」ブレザーズが答えた。「まず屋敷中を調べて、それから召使を尋問しましょう。それが捜査の常道というものですからな」

そこで明かりを取りよせ、ブレザーズ、ダフご両人は土地の巡査、ブリトルズ、ジャイルズ、つまり家中の者全部を引きつれて、廊下の端にある小部屋へ行き、窓から外を見た。それから芝生を通って外へ出て、今度はその窓から中をのぞき込み、その後で燭台を手にとって鎧戸を調べ、それからカンテラを手にとって足跡をたどり、それからくま手を手にとって藪を突ついた。一同が息をこらして見物しているうちにこれらの仕事が終わると、刑事たちはまた屋内に入り、ジャイルズ氏とブリトルズに、昨夜の冒険をもう一度芝居がかりで再演させた。これは六回ほど繰り返して行なわれたのであるが、一回目には重要な

点でお互いの証言が一カ所しか喰い違っていないのに、六回目になるとそれが十カ所以上も喰い違ってしまった。この素晴らしいアンコール公演が終わってから、ブレザーズとダフの両人は他人を全部追い払って、長いこと二人だけで相談していた。そのものものしい秘密めいた態度に比べたら、名医たちが医学上至難の問題を論じ合うのなんかは、ほんの子供の遊びと言ってもよかろう。

その間お医者様は落ちつかぬ様子で、隣の部屋の中を行ったり来たりしていた。メイリー夫人とローズは心配そうな顔をしてそれを見つめている。

「やれやれ」足早に何度も行きつ戻りつした後に、先生ははたと立ち止まって言った。「どうしたらいいのか私にもよくわからん」

「正直ありのままに、あの子の話を刑事さんたちにお話ししたら、きっと許して貰えると思いますけど」と、ローズが言った。

「さあ、それはどうかわかりませんよ」お医者様は頭を振りながら言った。「あの刑事たちだって、その上司の警察官だって、許してくれそうにはありませんな。結局のところあの子は何者なんだ？　と尋ねるでしょうな。どこかから逃げて来た子だ。世間の常識や可能性にかけてみれば、あの子の話は大いに疑わしいということになりますよ」

「でも先生はもちろん信じていらっしゃるのでしょう？」ローズがあわてて口を挿んだ。

「私は信じています。どうも奇妙な話とは思いますがね。でもそんなものを信ずるのは、私が老いぼれの阿呆だからかもしれませんよ。ともかく経験豊かな警察官に信じて貰える

ような話では、とうていありませんな？」
「どうしてですか？」ローズがきいた。
「これは手きびしい反対尋問ですな。それはですね、警察官の目から見れば、怪しい点がどっさりあるからですよ。あの子の話では怪しい点の証明がつくだけで、本当らしい点の証明はできない。警察の連中と来たら、何故？　どうして？　を尋ねるだけで、人の言うことをありのままには受け取らないのですよ。いいですか？　あの子が自分でも言っているように、かつては泥棒の仲間だったこともあり、ある紳士のポケットからすりを働いた嫌疑で、警察署へ連行されたこともある。その紳士の家から無理やり連れて行かれた場所が、どんな場所か説明できないし、どこにあるのか全然見当もつかない。あの子を無理矢理にチャーチーへ連れて来た男たちというのが、どういうわけかあの子がひどく気に入って、窓から屋敷の中にしのび込ませた。そしてあの子がその家の人たちに急を知らせて、それで万事うまく事が解決しそうになった途端、あのへまな半人前の召使頭のやつが飛び込んで来て、ピストルで射ったという！　まるであの子がいいことをしようとするのを、わざと妨害したみたいじゃありませんか！　ねえ、これでおわかりでしょう？」
「もちろんよくわかりますわ」ローズはお医者様のせっかちな口調に笑い出した。「でも、それだからと言ってあの子に罪があるとは、考えられませんけれども」
「それはそうでしょうとも！　あなた方ご婦人というのはよきにつけ悪しきにつけ、ものごとのいつも最初に目の前に現われた一面しか、お考えにならないのですからね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong